

新潟大学の教養教育改革におけるこれからの大きな問題

前学長 荒川 正 昭

今ほど大学教育が厳しく声を大にして問われたことはなく、そのなかで最近また新しく脚光を浴びているのが、全学的な基盤を持つ教養教育であります。平成3年の大綱化以来、多くの大学では、恐らくそのとき置かれた状況においてベストと思われる方法でそれぞれ教養部改革の方策を選択し、教養教育をどうしていくかについてそれなりの工夫をしてきたと思います。本学の場合は、大学教育開発研究センターが組織され、初代吉村センター長、現在の小林センター長を中心に、それぞれの立場から全学的な協力を得て教養教育の変革を進めてきました。

これからの大きな問題について、いくつか述べたいと思います。一つは、私どもが一体どこまでハード面で教養教育改革に対してできるかということです。本当は大きな立派な建物ができればいいんですが、国の施策でやむなく、現在の教養教育の校舎を改築しています。ハード面の改革とは、単に壁を塗り替えたり色をつけたりなどのことだけでなく、機能的な上昇でもあり、それも目標にするべきだと思います。ハード面が少しでも向上することを願い、大学の力を教養教育改革の方に向けるように私もささやかながら尽力してきました。

もう一つはソフト面の問題です。今のこの体制から、全学的な体制をいかにより良くしていくか、という問題があります。今のところ全学的に、学部教育のなかでは教養教育と専門領域における基礎的な教育を、さらに高度な教育は大学院の修士課程あるいは博士課程で、という大方の理解が得られています。そのなかで、教養教育、あるいは専門の基礎教育がますます重要性を増し、それを支えるための人的体制づくりが不可欠になっています。ところが、人的なものについては、また第10次定員削減が来ており、現在の政府方針からしますと将来的にも厳しいものがあります。

厳しい現状のもとでいろいろと仕組みを変更していく上で、一つの教科を一つの専門学科でまかないきれない、あるいは一つの分野を一つの学科あるいは一つの学部でまかないきれないという問題が生じてきます。そういう問題を全学的に協力して解決していけるかどうか、今一番の緊急の課題となります。

教養教育だけならいいんですが、専門教育、さらに高等な教育、それに研究と、先生方の負担も非常に多くなるわけです。そのために、先生方には質の高いものをいかに効率よく備えるかが問われます。

さらに私も含めた教員に問われることは、教育に対する熱意と同時に、やはり教育技術、あるいはまた学生に対する接し方の改善だろうと思います。ここにFDの大きな目的もあ

るわけです。今年度までに本学で開催されたFDでは、幸いにも大変熱心な参加者の増加がみられますし、参加できなかった先生方にも各学部、学科でFDの必要性がじわりと浸透している状態に達しています。

私も含めた教員には、教養教育の改革におけるハード面・ソフト面の問題を念頭に置きながら、小林センター長をはじめ直接担当されている先生方の悩みを広く吸収しながら、教養教育がどうあるべきかについて日々新たに考え、改革を実施していくことが求められています。本学の教養教育が一層発展することを願っています。

(平成13年9月27日開催 第4回FDの学長挨拶より)